2024年10月27日 降誕前第9主日礼拝メッセージ

「髪の毛の数まで知る」　　水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 10章 28−31節

今から20年前の2004年10月23日の夕刻、新潟県中越地方を震源とするマグニチュード6.8、最大震度7の大地震が発生しました。この地震によって、災害関連死を含めて68名の方々がなくなり、4800名余りが負傷、全壊した住宅は約3200戸、半壊や一部破損を含めると約12万戸もの家が被害に遭いました。避難しなければならなかった人は、多い時で10万名にものぼったといいます。その大地震からちょうど20年がたったわけです。きっと今なお、地震の瞬間の恐怖や被災生活のしんどさ、住む所や大切な家族を奪われた悲しみが忘れられない人たちがいることを思います。そしてそれとともに、その他今まで多くの、毎年のように起こっている様々な災害に遭われた本当に多くの人々のことも思います。改めて、そんな痛みを持ちつつ歩んでこられた方々、今なお痛みに耐えながら歩んでおられる方々のことを憶えて私たちは共に祈りを合わせ、また決して人ごとでない私たち自身のこととしても私たちはとらえて、来るべき災いの日に備えつつ、毎日をせいいっぱい生きて行かなければいけないと思わされております。

私たちにとっての災いとは、自然災害のみではありません。この世界では、私たちの気付かないところで、様々な災いに襲われている人々がおりますが、すっかり忘れ去られている痛ましい事件が多すぎる。あちこち多すぎるから、逆に忘れ去られるのも早いのかもしれません。例えば今から16年前の8月、インド東部のオリッサ州カンダマール地区で、ヒンズー原理主義者の武装集団によってキリスト教への迫害がおきました。暴徒化したヒンズー原理主義者たちは教会堂や修道院、信徒の家に火をつけ、牧師や信徒を拷問し、十数人を殺害するなどしたため、牧師や信徒らはやむなく伝染病や毒蛇の危険に満ちたジャングルに逃げ込まざるを得なかったといいます。この事件はその2日前、ヒンズー教の聖職者ら4人が何者かによって殺害されたことに始まるわけですが、殺害されたリーダーが長年クリスチャンの宣教活動を批判していたことから、ヒンズー教の聖職者たちは「クリスチャンが暗殺した」と主張し、暴徒化したわけです。1000人にも膨れ上がった暴徒たちはまず孤児院を襲撃し、20歳の女性を生きたまま焼き殺し、さらに別の地区では4人のクリスチャンを追いかけ剣で切りつけ殺害し、村から村へ移動しながらクリスチャンの家や礼拝堂、修道院を焼いたり、女性をレイプしてから殺したりという殺戮を繰り返したといいます。オリッサ州政府によると、事件発生から1週

間で、16 人が殺され 35 人が負傷、558 もの信徒の家と 17 の礼拝堂および修道院が燃やされ、1 万 2000 人あまりがジャングルの難民キャンプに逃れたと発表しています。3 週間後には死者 100 人、難民は 5 万人に達したと発表されています。この事件がその後どうなったのかは分かっていませんが、改めて思わされるのは、私たち人間は本当に命というものを軽く見て軽く扱っているということ。神様が作られたこの世界からすれば、確かに人間はちっぽけな存在でしかないことは分かりますが、神様に作られた同じ被造物、同じ人間の仲間、隣人でありながら、何で隣人の命をそんなふうに扱えるのか。このインドの事件は、何百年も前のキリスト教徒の迫害事件ではない。つい 16 年前のことです。いくら主義主張、宗教が違っていても、若い女性を生きたまま焼き殺したり、レイプして殺したり、人を追い掛け回して斬り殺したり、とても 21 世紀の成熟した世界の、ロケットで宇宙へ出かけていこうかとまでになった人間のすることとは思えない。獣だってそんなことしないですよ。でもそれは、いまだに世界のあちこちでガチャガチャ行われている戦争でもそうですし、今の私たちの日本でも日常的に起こっていることなのでありました。弱々しいおばあさんを殴って金を奪うバイトって何だ。私たちの世界・私たちの社会、私たちの日本も、殺戮の行われたインドとちっとも違わないものであることを思います。

そしてその社会の未熟さは、この聖書の時代の社会の姿でもありました。今日の聖書は「マタイによる福音書」の 10 章の一部ですが、この 10 章はイエスさまが弟子たちの中から 12 人を使徒として任命し、神の国の宣教に派遣するに当たって様々な注意を与えているところです。「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も 2 枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい」。また、「わたしはあなたがたを遣わすのは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである」などと、それに伴う迫害をも予告しています。「わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい」。

しかしイエスさまは、迫害の手からは賢く逃れなければならないが、しかし迫害のために福音宣教を躊躇してはならない、人々を恐れてはならないと励ますのです。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」「2 羽の雀が 1 アサリオンで売られている

ではないか。だが、その 1 羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない」。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっているのだ、だから恐れるなと。イエスさまは今日のこの箇所において「恐れるな」と 3 度も繰り返していっております。しかし、そうは言っても、命を取られるのはやはり恐ろしいし、私ごときのようなちっぽけな者に何ができようか、と私たちはイエス様に口答えしたくなってしまいます。しかし、だからこそキリストはここで雀の話をされたのです。イエスさまは、「2 羽の雀が 1 アサリオンで売られている」と言いました。一方で「ルカによる福音書」においては「5羽の雀が2アサリオンで売られている」と言っています。つまり「1アサリオン出せば2羽の雀が買えて、2アサリオン出せば5羽の雀が買える」ということはすなわち、2アサリオン出せば雀4羽に1羽おまけでついてくるということになります。当時の1日の賃金を 6000 円と仮定した場合、1 アサリオンは、375 円となる計算になります。イエスは、1 羽の雀は 190 円にも満たない価値にもかかわらず、5 羽目の雀はその値段さえも付けられない「ただ同然」のものであることを示しつつ、しかしそのおまけのような1羽、「ただ同然」の価値しかないように見られるものであっても、神の許しがなければ決して死ぬことはない、私たちの命を司っておられる神の許しなしには、どんなにちっぽけな者であろうとも決して命を取られることはないのだ、ましてやあなた方はたくさんの雀よりもはるかにまさっている、あなた方の髪の毛までも一本残らず数えられているのだ、だから勇気を出せ、人々を恐れるな、体は殺しても魂を殺すことのできない者どもを恐れるな、自分の信念を貫け、福音をのべ伝えよと懸命に励ましを与えておられるのです。

私たちは、自分が親しい誰かのことをいかによく知っていると思っていても、あるいはその誰かのことをいかに愛しているつもりでも、その人の髪の毛の数までは知らない。確かに、そんなつまらん事までは知らなくてもよいわけですが、しかし、例えばよく世間で「マニア」とか「オタク」などと呼ばれる人々、すなわち周りからは狂気じみて見えるほどに何か一つのことに熱中する人たちというものは、世間の多くの人々があまり関心を示さない事柄にも異常なまでに興味を示すものです。人の誕生日、よく知ってる人いますよね。「あなたの誕生日明日ですよね」とか突然言われたり。あるいは『ワンピース』って漫画の単行本の途中に、登場人物の誕生日とか書いてあるおまけページみたいなものがあって、話の本筋とは全く関係ないので、言ってみたらもう些末な情報なんですけども、それを本当によく調べ上げている人もなんかもおりますね。『サザエさん』の家の間取りについて研究した人もいます。『あしたのジョー』の主人公、矢吹丈の漫画には描かれていないもの

を含む全ての戦績について調べ上げまとめた人もあります。一般の人々にとっては、誰それの誕生日が何月何日だろうと、サザエさんの家の間取りがどうだろうと、大した問題ではないわけです。しかし、あるものを好きな人にとっては、それがいかに些細なことであろうと、あらゆることを知っておきたいと思うものなのでしょう。同じように神様も、世間的には誰も関心を払わないような私であっても、その私の髪の毛の数までも分かっているほどに私のことを愛して下さっているわけです。そこまでできるのは親でも恋人でもない。いくらなんでもそこまでは無理。神様しかおられないことを思います。そして私たちは、そんな神様の許しがなければ決して命を奪われることは決してない、そうイエス様はおっしゃっておられる。神様はそれくらい、こんなしょーもない私のことをも大事に思い、興味を持ち、愛してくださっているっていうわけです。

ではインドで命を無残に奪われた女性たちの死は、なぜ神様がお許しになったのでしょうか。もちろんそれは私たちにはわかるものではなく、想像するしかありません。でももしかしたら、それは神様の独り子イエス・キリストがそうであったように、その命を持った尊く痛ましい犠牲が私たちの世界の救いのため・あるいは私たちを罪へと向き合わせ悔い改めへと導くために必要だと神様が思われたから、そのために彼女らの大事な命を用いようとお決めになったということなのかもしれません。もちろん痛ましい死を遂げざるを得なかった本人たちは、痛みと恐怖と絶望とで一杯であったことでしょう。しかしその痛ましい犠牲は、神様によって必ず報いられたに違いない。私たちの髪の毛の本数まで知るほどに私たちのことを深く愛して下さる神様は、そのささげられた痛ましく尊い犠牲をほったらかしにしておかれるはずがない。彼女たちの体は滅ぼされても、その魂だけは暴徒たちに滅ぼされることなく、今や涙も嘆きも労苦もない永遠の住まいである天上にて、神様と共に安らかにあることを私たちは信じたいと思います。

髪の毛の本数さえも知るほどに神が愛しておられた彼女たちの犠牲は、まさに独り子であったにもかかわらずこの世の救いのため・人間の罪の滅びからの救いのために十字架にかかったキリストの犠牲と同じものでした。残された私たちは、そのキリストと同じ犠牲を無駄にすることなく、これからも恐れずに平和な神の国たる世界を作り出す者となりたいと思います。「こんな私に何ができるんだ」と思うこともありますけども、こんな私たちのことも、神様は髪の毛の数を知るほどにめちゃくちゃ愛して下さっているはずですから、私たちも自信をもって毎日を歩んでいきたいと思います。